

ゲオルク・シュライバー
ドイツの農民信心
——教会民俗学へのスケッチ—— (1937)

[2]

河 野 眞 (訳・解説)

目 次

[訳者解説]

著者について

農民存在がテーマとなった事情 1：民俗学の一般的特徴

農民存在がテーマとなった事情 2：ナチズムの影響への教会の対抗

著述の实际的性格：司牧活動への指針

[本文] ドイツの農民信心

——教会民俗学へのスケッチ——

0. 緒言

1. 序論

2. 信心者としての農民存在

3. 活力の流露

4. 神との繋がり

(以上52号)

5. プリミティヴ性

6. 信奉

7. ドイツ的な生き方

8. 民衆信仰心のダイナミズム (途中まで本号)

9. 衰微する民衆信心

10. 希望の予兆

[訳注] *を付けた人名・事項など

5 プリミティヴ性

しかし設問は、ある特定の角度から先鋭な方向へ向かう。*プリミティヴ性は果たして民間信心の中では消えてしまうのであろうか。

その貸借対照表をつかむのは容易ではない。たしかに、プリミティヴな習俗の中には隠滅に向かったものもある。*ルードルフ・クリスは、その研究領域に照らして、二つの方向での消滅を指摘した。一つは供儀習俗の消滅、二つには巡礼地願像 (Gnadenbilder) の地域と結びついた作用観念の消滅である⁴⁴⁾。フィールドワークに情熱を注ぎ新鮮な好奇心にあふれ (とりわけ古^{アルト}バイエルン地域について多くの知見をもたらした) 研究者のこの見解はまことに注目に値する⁴⁵⁾。しかし個別観察から、プリミティヴ性の死滅という結論を導くのは必ずしも適切ではない。事実として、かつて供物の風習としおこなわれていた鉄作りの馬は、民俗学が確かめているように、今も細々と続いている。蠟作りの種々のフィギュアがめずらしくなってきたのはその通りである。しかしルードルフ・クリスやマックス・ルムプフの見解とは相違することになるが、プリミティヴ性・根源性・民の真正性、そして民の諸層が毀損されることなく強靱な作用力を持続させてきたことは確かである。

これは、民間宗教心の資料研究 (これは屢々狭く解されているが) を広げるなら、容易に得られる帰結である。試みに、現今の巡礼地実録への書き込みを見られたい。もともと、巡礼地のそうしたプリミティヴな下書きは、民俗学者の誰にも手が届くわけではないかも知れない⁴⁶⁾。つまり、アルトエッティングの礼拝堂の素朴な銘文や、*パッサウのマリーア=ヒルフの丘へのぼる聖階段の外壁 (その靈験の道行) のようなありありと見えるようなものではない。が、こうしたいわば草稿からも、子供のような真心のこもった信頼が語りかけている。ちなみに1933年の時点でも、私たちは、ブルクハウゼンの*ザンクト・マリーア・キュ

44) Rudolf KRISS, *Deutscher Volksglaube und deutsche Volksfrömmigkeit in Vergangenheit und Gegenwart*. In: *Volksspiegel, Zeitschrift für deutsche Soziologie und Volkswissenschaft*, 1(1934), S. 28ff.

45) Rudolf KRISS, *Volkskundliches aus altpbayrischen Gnadenstätten. Beiträge zu einer Geographie des Wallfahrtsbrauchtums*. Augsburg 1931.; DERSELBE, *Volkskundliches aus altpbayrischen Gnadenstätten. Nachträge*. Brünn 1933.; DERSELBE, *Die religiöse Volkskunde Altbayerns. Dargestellt an den Wallfahrtsbräuchen*. Baden bei Wien 1933. —ルードルフ・クリスの研究はさらにシュヴァーベン・トルコまで延びている。

46) 筆者の見限りでは、民間宗教性の資料研究は、これまでこの種類の資料を計画的に把握してこなかった。農民的民衆信仰心をめぐる資料の知見はもっと工夫が必要である。これに関して、とりあえず、先にふれた3点の文献を参照、M. RUMPF, *Religiöse Volkskunde* (1933前掲注2).; G. SCHREIBER, *Volksreligiosität* (1936前掲注6).; F. X. BUCHNER, *Volk und Kult* (1937前掲注1).; また中世についてはファイトの研究を参照、Andreas VEIT, *Volksfrommes Brauchtum und Kirche* (1936前掲注29).

マニスにおいて、その年すなわち1933年に書き込まれた文言を読んだものである。《聖者ウィルゲフォルティス様（これは聖女キュマニスを指す）、我らのためにお祈り下さい》（〔訳注〕 W[=V]ilgefortis カある乙女）⁴⁷⁾。他方、キュマニス伝説を手掛けた人たちの中には、キュマニス信奉はすでに消滅したと見る向きも少なくない。

重要なことがらをもう一つ挙げれば、奉納繪もまた衰退が言われるが、供え物や個人々々の立願や自発的な献身の豊かな土壌は、（宗教的動機が原初そのものの経験と広く延びる領域を見出す）結びつきにおいて作動し続けている。ただそれは、ほとんど無技巧の行き方での表出である。そこへ行き着く幅広い圏となっているのは供犠ミサ（Votivmesse〔訳注〕 奉献ミサとも、物質的な供え物が関わるミサで、やや二次的な儀礼）で、そこでは最も個的な心情を現れ出る。そして絆は追憶へと伸びてゆく。

それだけではない。オフィシャルな信奉儀礼の中にも、*聖アンナや*聖ゼバスティアンや*聖ドナトゥスや*聖フローリアンなど多彩な聖者への民衆的な帰依や連禱が組み込まれている。それどころか、バイエルン=シュヴァーベンのミンデルハイムでは、8月13日から始まる*女人の三十日には神父に伴われず女性たちだけで土地の女人礼拝堂において民衆的帰依が行なわれる。同地では、同じくロザリオ祈禱が、毎日、朝の4時に奉献堂で始まり、4時半には墓所礼拝堂で、6時に*イギリス聖女の会堂へと続く。

さらに同胞団体は、非常に多くの場合、古くからの習わしをまもっている。先に挙げた*イェルク・フルンツベルクの都市は、農民の自力への自覚がみなぎる農村地帯の真ん中に位置しており、そこでは7月4日の*ウルリッヒの例祭日には鼠退散の禱りがなされる。ウルリッヒの畫像には足元に鼠を配置したものがあるが、それと同じである。これはまた、*ジーギスムント・マイスタリンによるニュルンベルク年代記が、《二つの川、レッヒ川と

47) この箇所ならびに類例については、G. シュニユラーとJ. M. リッツによるザンクト・キュマニスとヴォルト・サントに関する研究が、民衆信仰心の側面から補足してくれる。Gustav SCHNÜRER und Josef Maria RITZ, *Sankt Kümmernis und Volto* (Forschungen zur Volkskunde, Heft 13/15). Düsseldorf 1934. この研究書は、ドイツにおける農民的信仰心の歴史について豊富な資料を提供している。；またキュマニス研究の最新の見解として次を参照、In: Volk und Volkstum, Bd. 2, S. 364ff.; なおボルンハウゼンの見解もあるが、シュニユラーとリッツの研究を参照しなかったようである。Karl BORNHAUSEN, *Volks Glaube*, bei Wilhelm PESSLER, *Handbuch der deutschen Volkskunde*, Bd. 1. Potsdam 1935, S. 211ff.; またフラマン語地域もキュマニス・モチーフの豊かな一画を占めることは、次を参照、Jean GESSLER, *La legende de Sainte Wilgeforte ou Ontcommen. Notes bibliographiques et iconographiques*. In: *Le Folklore brabancon*, 15 (1936), p. 307-401. さらにG. シュニユラーから聞いたところでは、フランドル地方については、新たにかなり大部な研究を用意しているとのことである。

ヴェルタッハ川の間では、聖ウルリッヒのお陰で鼠一匹いない》の記述を想起させる⁴⁸⁾。

しかし特筆すべきは、巡礼地へのプライベートなイニシアティブが生きていることであろう。オフィシャルな祈願行列や十字架の道行と並んで、これが、存続の正しさと活動を示している。ちなみに*ヨゼフィニズムは、多くの勅令によって、巡礼地を公的かつ地域行政の一助とすることに向けて強制力を用い、巡礼地への参詣を地域の司祭の同意と同伴の下での祈願行列に改変することを推し進めた⁴⁹⁾。が、それは小教区事案の過大視であり、同時に国家教会政策、ならびに啓蒙主義的な教会法学と司牧への過度な移譲だったと言ってよいだろう。それに対抗する収穫を得たのが19世紀で、自我・血族・隣人組・一般民衆の自由に喝采を送る啓蒙主義に対して、プライベートな祈願行と巡礼への憧憬と希求に道を開いたのだった。それゆえ、すでに祈願行列 (Bedefahrt) や順礼 (sacra peregrinatio) が、昔と同じく近時においても、民衆信心の思念と感覚への幅広い土床を掘っていたのである。

同じく、迷える魂への供養は、簡素ながらも同時にアクティブな民衆信仰心に、ほとんど無限の広がりをもたらしている。特筆すべきは死者追憶の慣習で、(第一次)世界大戦にちなみ、西部戦線での不明兵士の墓と集団墓地によって新たな動きが起き、プライベートな帰依を改めて活発ならしめた。民衆心情の深甚な開示であり、ライヒェナウとクリュニー ([訳注] 中世の儀礼改革を先導した代表例)、タンネンベルク (Tannenberg) とドウオモン (Douaumont [訳注] 第一次世界大戦の激戦地として多数の死者が出た代表例) と並べて挙げてもよく、死者供養の大きな力の里程標を想起させる⁵⁰⁾。聖ミヒアエル、聖ゲオルク、聖ゼバスティアンもそうであり、

48) Heinrich SAMSON, *Die Heiligen als Kirchenpatrone und ihre Auswahl für die Erzdiözese Köln und für die Bistümer Münster, Paderborn, Trier, Hildesheim und Osnabrück*. Paderborn 1892, S. 376.

49) Georg SCHREIBER, *Wallfahrt und Volkstum in Geschichte und Leben* (Forschungen zur Volkskunde, Heft 16/17). Düsseldorf 1934, S. 73ff.; Edmund FRIESS, *Geschichts- und volkskundliche Betrachtungen über das Wallfahrtswesen. Mit Berücksichtigung österreichischer, besonders niederösterreichischer Verhältnisse*. In: *Unsere Heimat*, 9 (1936), Nr. 1, 2, 3, 4. S. 1ff.; またパーダーボルン一帯の18世紀の状況に関する優れた考察としてクリストフ・フェルカーの研究を参照, Christoph VÖLKER, *Aus dem religiösen Volksleben im Bistum Paderborn während des 17. Und 18. Jharhunderts*, bei Paul SIMON (Hrsg.), (Festschrift: Zum 1100 Jahr. Jubiläum d. Reliquienübertrag im Auftr. D. Metropolitankapitels) Sankt Liborius, sein Dom und sein Bistum. Paderborn 1936, 121ff., bes. S. 179.; 原資料が注目すべき幅の広さによって巡礼地習俗が記述された事例として次を参照, Max BRAUBACH, *Die kirchliche Aufklärung im katholischen Deutschland im Spiegel des „Journal von und für Deutschland“ (1784–1792)*. In: *Historisches Jahrbuch*, 54 (1934), S. 1–63, 178–220.

50) ここでまず考えられるのは、ドイツの戦没者墓地とそれへ墓参である。ライヒェナウの826か所の墓地に因む兄弟名簿には4万人に垂んとする名前が記録されている。参照, Konrad

これら諸聖人は、南ドイツだけでなく他所においても、農民教会堂における死者供養を莊嚴にし、また古きドイツの戦闘救援聖者とも重なり合う（〔訳注〕この3聖者は戦争守護者でもあった）⁵¹⁾。

しかしどんな民衆信仰心も、規律ある信奉との関係によって支えられることがなければ萎れて色褪せる。すなわち前者は、後者によってたえず養われて力を付与されるのである。

6 信奉

教会信奉は、知的な上層の特別な身構えから流露するのではない。そうした見方を典礼にあてはめることがないように注意だけはしておこう。

信奉が湧き出るのは、超個体的な諸分野からであり、また教義の理念からであり、さらに悲痛な神秘劇からであり、実事に根差した神との繋がりからである。かかる信奉は、その実際からうかがえるように、教会的ゲマインシャフト精神の表出でもあり、その効用から個的な向上にして強力な教導と言ってよく、正に*美しき魂の敬神を成就させる。こうした信奉は、たしかにオフィシャルな正当性の標である。規範・ゲマインシャフト秩序・神秘的姿勢・信奉意識・信奉保持と言ってもよい⁵²⁾。しかし断じて、^{フォルク}民に疎遠ではなく^{フォルク}民を破壊するのでもない。

規範的信奉が*民のたましいの最も微妙な活動を常に封じてきたと見るのは、とんでもない誤りであり、浅薄な教えと言ってよい。逆であり、オフィシャルな信奉教本、すなわち典礼規則やそれに類した諸規則の効力は、民衆信仰心にとって掛け替えのないものである。なぜなら民衆信仰心は、支えとなる枠組みと実りゆたかな調整と神聖な手入れを要するのであり、それなくしては瓦解する他ないからである。典礼がドイツ地域へ入った時も、民に親しなかった*ザンクト・ブラージェンの修院長伯マルティーン2世ゲルベルト（Fürstabt Martin II. Gerbert von St. Blasien）が典礼を取り上げた時も、典礼史は規則については黙している。すなわち、書記化された規律が積み重なる秩序作りには踏み込まなかったのは、もっともな理由があったのである。

しかしオフィシャルな信奉は、その重点部分では、民衆信奉と民衆典礼となってゆく。

BEYERLE, *Die Kultur der Abtei Reichenau*. 2 Bde. München 1925, Bd. 1, S. 293.

51) 一聯の戦闘救援聖者をめぐる推移を見ると、聖マウリティウスが後退したことをうかがえる。参照、Adalbert HERZBERG, *Der heilige Mauritius. Ein Beitrag zur Geschichte der deutschen Mauritiusverehrung* (Forschungen zur Volkskunde, Heft 25/26). Düsseldorf 1936, S. 104ff.

52) J. WESTERMAYER, *Frömmigkeit*, bei M. BUCHBERGER, *Lexikon für Theologie und Kirche*, Bd. 4, Sp. 211ff.; L. BOPP, *Liturgie und Lebensstil*. Freiburg 1936.

*クリスマス・ミサ, *聖体祭の行列, *五月帰依, *ローラー・ミサ〔訳注〕待降節第四主日のミサ)がそうである⁵³⁾。こうした堅固な背骨の無くんば, これら岩盤の無くんば, この宗教的〔訳注〕キリスト教会の)エネルギー中枢の無くんば, 宗教的な民衆信仰心それ自体も力と形を失い, 荒れ地をさまよう水流さながら砂地に消えゆく他はない。なぜなら民衆帰依心の頂点は, 護符めいたものにあるのではなく, その深奥の意味付与は, 聖性図像と威嚇的な現実との魔術的結合に存するのでもないからである。たしかに, そうした魔術的感情が伏流となっていることも屢々である。しかしそれを取り除くと, 常に民の力を湛えた, より純粋な信仰観念がはたらいしていることが明らかになる。事ノ次第, 寔ニスクノ如シ。しかしすべて信心なるものは, 況や神との繋がりをもつ民の信心は, 内奥の自然の赴くところ, 自明・確実・明白を最小現存物に実感することへ向かわざるを得ない。さもなければ, 意志の進展から力強さが奪われ, 宗教感情も大胆な伸長を期し得まい。

しかしまた, かかる民衆信心について, 魔術性から遠ざかるや, 土との近しさや自然らしさや豊かな予感をまったく失ってしまうと考えるのは, 誤りである。ちなみに, ルードルフ・クリスはこう記している, 《本来の民衆信心, すなわちプリミティヴな人間すなわち庶民の元々土に近く, 外界を苦もなく人格化する希求に由来する強く魔術的な宗教姿勢は, すでに死滅したか, あるいは死に絶えつつある》⁵⁴⁾。これは, 魔術の要素を問いなおす限りでは正しいかも知れない。しかし, 民衆信心が, 今日, 自然との結びつきを欠きつつあるとの指摘となると, その判断には同調できない。*教会祝禱の力強い生命圏は, 昔も今も, 力に満ちた自然性と偉大な大地近接を発展させているからである。*マリア〔訳注〕聖母)被昇天の時節における野草祝禱, *十二聖夜の期間ならびに最終日に各地で行われる家屋祝禱, 四旬節のイントロイトゥスを劃するあの*灰の十字架, また*棕櫚聖別の最後に(種子の発芽を促すとして)畑に埋められる棕櫚, これらにあっては, 自然と豊饒のリズム, また芽に宿る力と生命の若返りの思いが, 持ち伝えられた民の仕草に合流する。かく, 農民の根本感情と創造の根源力はまぎまぎと保たれている。

しかしオフィシャルな信心や正統な信奉と並んで, 予感や秘密の分野とのある種の混合が起きるのも一方の事実だろう。不確かな未来を覗こうとする急迫も屢々起きる。人間の営みでは普通に頭をもたげる魔術への心の傾きが民衆体の次元で湧き上がることは多く, また好んで農民信心に定着する。それは, 事が形をとるにあたって並行して起きる様相に他ならず, 殊に民衆信心ではたしかにこれがよく顔を出す。あたかも^{つたかづら}鳶蔓の如く, 古い川床の如

53) この民衆性 (Volkhaftigkeit) の広がり, 先述のブフナーの論説においても指摘されている。

参照, F. X. BUCHNER, *Volk und Kult* (1937 前掲注 1)。

54) R. KRISS, *Deutscher Volksglaube und deutsche Volksfrömmigkeit* (1934 前掲注 44), S. 28.

く、また脇部屋の如く。あるいは、憧れ出る心として、高揚した使命感として、さらに運命を前にした不安として。と共に、何か違和感が紛れ込んだ感覚でもある。異質なものの、古代ギリシア・ローマの妖精とか、アジア的観念の盛り上がりといったもの。つまり、宗教史家や民族学者がよく知っているケルトやゲルマンやインドゲルマンその他の古い霊力が忍び込んだのかも知れない⁵⁵⁾。

かく、民衆信心の起源領域は多様である。明らかな資料と隠れた資料、容易に把握できる資料と面倒な資料が混在している。ゲルマンあるいはゲルマン以前に起源をもつ魔法や祝禱詞章は、推移を閲しつつ、理解も教会祝禱になったり、*ザンクト・ヴィクトルのフーゴ(114年没[訳注] ユーグ・ド・サン・ヴィクトワール)の準秘跡となったりした⁵⁶⁾。常に特別の肯定を迫ったのは、民衆体の根源力であった。むろん、境界はグラデーションを呈した。実際、個々の司牧者は、局面が推移する中で、世俗の呪文詞章を混ぜることもあり、それどころか早く中世のアルザスにその例があるように、そうした詞章の広がりや改変にも関わっていたからである⁵⁷⁾。同様の動きは、他所でも見ることができるだろう。

しかし典礼に照らして、民衆信心を船底のバラストさながら余計なもの、また忌まわしいものとみなすのは大間違いである。たしかにオフィシャルな信仰は、魔術的な要素を、一口

55) シュテッフェスの深く掘り下げた考察を参照, Johann STEFFES, *Volkstum im Lichte von Religion und Magie*. In: *Volk und Volkstum*, Bd. 2 (1937), S. 156ff.; 同誌上のヴァンダーレの論考をも参照, Georg WUNDERLE, *Religionspsychologie und Volkskunde. Über Aufgängen und Fragestellungen der volkskundlichen Forschung*. In: *Volk und Volkstum*, Bd. 2 (1937), S. 131ff.; 同誌にはまた A. L. ファイトの寄稿も見ることができる。Andreas Ludwig VEIT, *Anik-sakrales Brauchtum im merowingischen Gallen*. In: *Volk und Volkstum*, Bd. 1 (1936), S. 121ff.; DERSELBE, *Weihnachten im merowingischen Gallen*. In: *Volk und Volkstum*, Bd. 2 (1937), S. 247ff.

56) A. FRANZ, *Die kirchliche Benediktionen im Mittelalter* (1909 前掲注29), S. 8ff.; またアントーン・B・マイヤーをも参照, Anton B. MAYER, *Altchristliche Liturgie und Germanentum*. In: *Jahrbuch für Liturgiewissenschaft*, 5 (1925), S. 80ff.; DERSELBE, *Die Liturgie und der Geist der Gotik*. (1926), S. 68ff.; Ildefons HERWEGEN, *Antike, Germanentum und Christentum*. Salzburg 1933.; Hugo (Volkhaftigkeit) の広がりとは、先述のブフナーの論説においても指摘されている。参照, F. X. DAUSEND, *Germanische Frömmigkeit in der kirchlichen Liturgie*. Wiesbaden 1936. —これへの次の書評を参照, Anton STONNER, In: *Theologische Revue*, 55 (1936), Sp. 356f.; 評者シュトンナー自身の著作をも参照, Anton STONNER, *Der Lichtgedanke in der Hl. Schrift und Meßliturgie*. Paderborn 1936.; また先述のファイトをも参照, A. L. VEIT, *Volksfrommes Brauchtum und Kirche* (1936 前掲注29), S. 13ff.

57) A. FRANZ, *Die kirchliche Benediktionen im Mittelalter* (1909 前掲注29) 特に天候祝禱 (Wettersegen) だが、これには同書の索引を参照。; Joseph LEFFTZ, *Alte Heilsegen und Beschwörungsformeln*. In: *Archiv für elsässische Kirchengeschichte*, 7 (1932), S. 199.

で言えばあらゆる種類の迷信を*《旗を掲げたる軍団》（〔訳注〕「雅歌」6-4：恐ろしきものの意）として斥けるであろうし、また斥けねばなるまい。自己保存の観点からもそうである。しかし同時に、必要な区分を以て臨むことによって、民衆信心の重要な部分を常に尊いものと知ることになるだろう。まさしく民衆信心は、民衆体から見ても教会から見ても、幾つかの領域において、注目すべきポジティブな機能をもっている。現今も正にそうである。

こうした民衆信心は、嘗て、独自性と意味合いをもっていた。*タウヌスのクローンベルクや*ライン河畔バッハラッハにゴシック様式の礼拝堂にルッカのヴォルト・サント（〔訳注〕S. 28への訳注 or クリス『ヨーロッパの巡礼地』の拙訳〔文楫堂 2005〕p. 000を参照）が勧請されたときである。騎士文化の調度として、またドイツ人のイタリア遍歴の経験として、各地の偉大な聖所や*笑う草地（〔訳注〕晴れやかな草地とも：19世後半に作られた教会歌の中のポピュラーな表現）や囲壁を備えた町々をつなぐ遙かな・魅惑的な巡礼路の思い出として。さらに、イングランドの征服王ウィリアムが禱ったとされる中世キリスト教の巨大な十字架像の思い出として。このトスカナの・イタリア的・西洋的な十字架形態は、ドイツの民衆十字架像に、また農民的な聖物となった。すなわち、ザンクト・キュマニスへの禱りやザンクト・キュマニスへの聯禱にこめられたのがそれである。まことに、ラテンの十字架像たるこのヴォルト・サントを民衆信奉が、ザンクト・ウィルゲフォルティスすなわち女性の姿のザンクト・キュマニスに鋳直したことに徴せば、民衆信奉の活発さがありありと分かるというものである。それだけではない。他に*ノートブルガもいるわけだが、ザンクト・キュマニスに農民の衣装に身を包み、シュヴァルヴァルトや上プファルツやアルゴイの農民礼拝堂に姿を見せている⁵⁸⁾。

しかし今日も民衆信心は、味わい深い特質、強烈なオリジナリティー、豊かな活動意志を持ち伝えている。細かな個々の特徴も失われはしない。

昔から今に至るまで生き続けているものに、*民衆列聖、すなわち民衆による聖者決定がある。その意図とは何か。民衆心理の深みから、敬虔に禱る群衆から、多数の農民巡礼者から、熱い願望が立ち昇り、神を畏み模範的であった男あるいは女を聖者として宣言し、祭壇上の栄誉にまで高めようとするのである。それにあたって、民衆はその流儀である簡素・単純を結びつける。マグニフィカート（〔訳注〕「ルカ傳」による晩課ないしは聖母讃歌）の旋律の中、簡素・単純は神への畏敬の次元へ入ってゆく。民衆情念の謎と不可解も一緒である。この民衆列聖こそ、オフィシャルな列聖の前段階に他ならない。民衆による崇敬の事実重点を置くからである。オフィシャルな列聖勅書の高らかなテノールも、この民衆的契機を堅持している⁵⁹⁾。上バイエルンの農民の息子であったパルツァムのコンラート（本誌52号 p. 156）が

58) 参照、前述 S. 29.

59) 民衆聖者に関する筆者の次の論説を参照、Georg SCHREIBER, *Volksheilige*. In: Mitteilungen des



[V] 十字架像, 等身大を超える木彫, 15世紀:
ビットブルク郡オルスフェルト／ライン
ラント (Orsfeld, Kr.Bitburg Rheinland),
出典, *Kunstdenkmäler der Rheinprovinz*, Bd.12-1
Kreis Bitburg, hrsg. v. E.Wackenroder, Düsseldorf
1927, S. 231, Abb. 161.



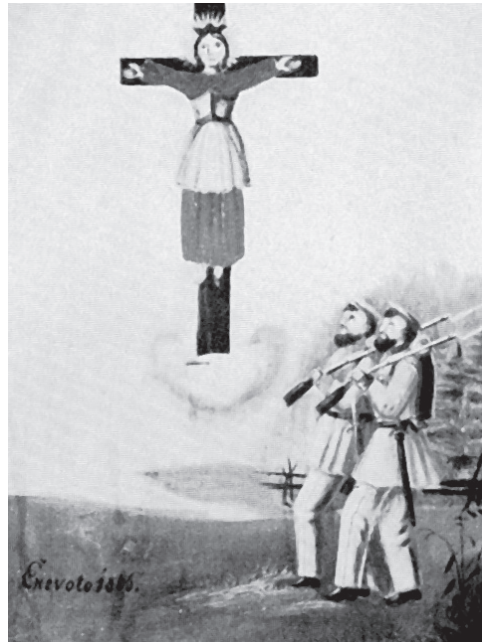
[VI] 「フランシスコ・ザビエル」アイヒシュ
テット司教区メーニング (Möning /D:
Eichstätt) の兄弟団手引書 (19世紀中頃
の口繪), 「F. X. ブフナー (Franz Xaver
Buchner) コレクション」参照, G.Schreiber,
Deutschland und Spanien. 1936. Düsseldorf 1936,
Taf. 31, Nr. 69.



[VII] 聖ヤコブと聖女メヒティルドの家庭祭壇
1828年 アマー湖畔ビアドルフ (Bierdorf
am Ammersee) の礼拝堂 G.Schreiber, 上記
Taf. 16, Abb. 34.



〔Ⅷ〕 キュマニスの祈禱紙片 ブルクハウゼンの旧キュマニスベルクで授けられていた。
出典, G.Schnürer u. J.M.Ritz, *St. Kümmernis und Volt Santo*. Düsseldorf 1934, Taf.43, Abb.98.



〔Ⅸ〕 聖キュマニスが描かれた奉納繪 ブルクハウゼンのザンクト・キュマニス礼拝堂 (St.- Kümmernis-Kapelle bei Burghausen) に施納 国立民俗学博物館 (Berlin) コレクション 〔訳注〕 このコレクションは第二次世界大戦直後に散逸した。



〔Ⅹ〕 聖ロフスと聖エラスムス レターベル (祭壇の背後の壁) の残決 1500年頃 出典, *Die Kunstdenkmäler der Rheinprovinz*, Bd. 12,1, S. 93, Abb. 55.

1934年に列福され次いで列聖されたが、それよりずっと前から、コンラートは簡素・平凡な民衆の農民信仰心の中で《神に嘉せられた者》として生きていた。同じく、ドルトムントの[ブラザー]*ヨルダン・マイや、インゴルシュタットの民衆宣教師*フィリップ・イエニンゲンや、レーゲンスブルクの司教*ヴィートマン、あるいは農民的なものの真只中に突き入るなら、カプチン会士*ヴィルスビーブルクのヴィクトリキウスがそうである⁶⁰⁾。なお付言しておくべきは、列聖とは無関係な農民的な民衆聖者の一群が存在することで、たとえばオーバークロイツベルクの*ザンクト・ヘルマンはその中の際立った存在である⁶¹⁾。

また民衆信仰心のもう一つの生きた表現である*霊験記については、衰微をきたしていると思われることがあるが、それは大きな間違いである。今日も、聴き届けられた霊験は書き記され、民衆宗教的な表現形態を見せる。*『ベネディクト会通信』、『イエスの聖心：便り』、『聖家族福音のしるべ』、また巡礼文献類、その他、民衆的な刊行物を開けば明らかのように、それらは口で話されるだけでなく読まれもしている。今日でも、オフィシャルな信奉の側から、民衆信仰心に向けてスカプラリオその他が授けられる⁶²⁾。

[原注62]

Deutschen Instituts für Volkskunde, Heft 1, Düsseldorf 1933, S. 9ff. ———なお願像への戴冠については、願像がこの一般で際立った崇敬を喜んだことについて証明が必要であろう。これに関連して次を参照, Fr. SCHUBERT, bei M. BUCHBERGER, Lexikon für Theologie und Kirche, Bd. 4, Sp. 549f.

60) 民衆宗教の面から注目すべきは、列聖に先立つ様相を伝える文献類である。たとえばヨルダン・マイに関する次を参照, Eleutherius ERMERT, *Bruder Jordan Mai*. Werl 1928.; Maria VILDHAUTH, *Bruder Jordan Mai. Ein sozialer Nothelfer unserer Zeit*. Dülmen 1931. ここには (S. 54) 次の〔訳者補記〕神に向けた) 祈禱が載せられている。《御身の聖なる教会以て、このお方に早々に列福の榮譽を授け給へ、そは、簡素と誠実にあつて御身に仕へる全ての者を励まれんがためなり》。なお民衆宗教に関わる多数の意義深い書物を刊行している出版社にはラウマン社 (Verlag Laumann) がある。

61) 参照, Josef Maria RITZ, *Der selige Hermann von Oberkreuzberg und verwandte Legendengestalten*. In: Bayerischer Heimatschutz, 22 (1926), Halbjahr 2, S. 82ff.

62) 〔訳者補記〕原注を本文に移した。なお引用される信心書の原題は以下の通り, *Marianischer Tugend-Spiegel Allen andächtigen Liebhaberen und Verehreren Mariae Zur Nachfolgung In drey Theilen fürgestellt, Deren der Erstere in sich enthaltet Die äußerliche Tugenden Mariae, Der Zweyte Die Innerliche, Der Dritte Verschiedene Gebetter, Die man Mariae zu Ehren täglich, wochentlich, monatlich, absonderlich in ihren Fest-Tägen das gantze Jahr hindurch, füglich verrichten kann. Seht nützlich für allerhand Stands-Personen, auch denen Wallfahrteren in Form eines Lehr- und Gebett-Buchs eingerichtet Von einem Priester der Gesellschaft Jesu. Mit Erlaubnuß deren Oberern. Schletstatt, gedruckt bey Frantz Udalrich Gasser, 1739.*

★スカプラリオは昔も今も民衆の生きた姿と結びついている。その民衆的な発展の歴史をうかがうために、次の信心書に注目したい。『敬神の念篤きすべてのマリア愛惜者と崇敬者のためのマリアの美德亀鑑三部：第一部はマリアの徳目の外観，第二部は徳目の内面，第三部は祈禱諸種。即ちマリアを讃へる毎日の禱り，毎週の禱り，毎月の禱り，とりわけ一年を通したマリア諸祭日の禱りを為すを得るためなり。さればすべての身分にとりて，また巡礼にあたりての手引きを，教導・禱りの書物の形態に整えたり。イエズス会の一神父これを呈す。★★官庁許可済 シュレットシュタットにてフランツ・ウダルリッヒ・ガッサー書肆にて印行 1739年』——なおこの書に載せられたスカプラリオ歌の第一節は次である。《見よ今日も，まざまざと現はれたるは，いにしへのカルメル会士の受けたりしいとも奇しき飾りなり。すなわちマリアは天にあり，現世のシモン・ストックに，スカプラリオを授けたり》(S. 463)。これらの歌は，多数の民衆的な祭壇畫や信心畫と（特にカルメル会が関係する教会地域において）照応する。これについては筆者の著作『ドイツとスペイン』を参照，G. SCHREIBER, *Deutschland und Spanien* (1936前掲注17), S. 534 (索引)。なおマックス・ルムプフはスカプラリオを取り上げておらず，供物ミサにも言及していない。参照，M. RUMPF, *Religiöse Volkskunde* (1933前掲注2)。

[訳注] ★スカプラリオ (Skapulier)：ここではベネディクト会士などの肩衣（これが原義ともされるが）ではなく，小さな四角の布片二枚を紐でつなぎ，胸と背中に振り分けるお守りを指す。布片は最小では10cm四方のこともあり，聖母に関係した図柄が表されていることが多い。13世紀のカルメル会総長シモン・ストック（英南東ケント伯領で生まれ1265年にボルドーで没）が聖処女マリアを靈視し，これを着けることにより死後の煉獄の業火を免れると告げられたことから，カルメル会によって広められたのがお守りとしての普及のもとになった。《茶色のスカプラリオ》とも言われるのは，同会に因む駱駝色が多いことによる。★★官庁許可済：検閲を経たことを表す決まり文句。

スカプラレオの他にも，メダルや十字架の道行や供儀ミサが許される。それらは，危険に際してのお守りという契機において常に豊富な経験と，注目すべき細部を含む慣習と，生きた宗教性と，また少なからぬ詩的な意味づけを与えてきた⁶³⁾。靈験にも神秘性を感得しようとするのは民衆の常である。もっとも，民俗学は，宗教史においては夙に周知であるこの重要な解明原理から豊かな収穫をほとんど得てこなかった⁶⁴⁾。

63) 供儀ミサ（奉献ミサ Votivmesse）は，中世についてはアードルフ・フランツが取り上げている。参照，A. FRANZ, *Die kirchliche Benediktionen im Mittelalter* (1909 前掲注29), S. 115ff., 118ff.; しかし近代については研究が望まれる。——なお『典礼研究年報』(*Jahrbuch für Liturgiewissenschaft*) 創刊から10年間 (1921–1930) への索引 (Münster i. W. 1933) を参照，S. 31(見出し語：ミサ Messe), S. 46 (見出し語：死者 Tote)

64) 本文に移す。なお書名の原語表記：LEBEN Vnd Wunderthaten des H. Magni / Deß großen Apostels / Nothelffers / Beichtigers / Stüffters / vnd Ersten Abts / seines Vhralten Closters zu Füessen / Erstlich Lateinisch beschrieben vnd corrigirt, Anjetzo aber zu Ehren Gottes / vnd gemelten Heiligens / vnd den Landsleuthen zu gutem Teutsch gemacht / Herrn Martin Abbtten erstbemelten Gotteshauses S. Magni in Füessen. Gedruckt im Fürstl. Stüfft Kempten / Durch Rudolff Dreherr. Anno M.D.C.LXV.

[原注64]

ドイツの靈驗記録の諸本における農民の位置づけは、歴史研究にはまことに魅力的である。奉納繪（＝繪馬）の色彩に富んだ図像世界を文字の注解にて読むことができるからである。たとえば次のタイトルの一書を挙げてもよい。★¹『聖マールグヌス即ち偉大なる使徒・救難者・聴罪師にして★²フュッセンのいとも古き僧院の建設者にして初代の院長、その生涯と奇蹟の数々。元はラテン語にて書され整版となりしが、今、これなる聖者の崇敬そして村々諸人のため、上述のフュッセンに所在する聖マールグヌスの館の主宰、マルティーン院長によりて良きドイツ語に写されたり。ケムプテン伯の施設にての印刷はルードルフ・ドレーアー之を司どりぬ。1665年』。そこには（S. 132）次の記述が見える。《一頭の馬、フュッセンなる聖マールグヌスの聖所にて淨聖受けて健やかになることあり。また別の農夫、馬一頭贖ひたるも、虫に冒されたるか、あるいは何とも知れぬ障害のあれたれば、農夫、聖マールグヌスを崇敬して立願なしぬ。而して聖マールグヌスの教会堂へ馬連れ来れば、司祭、馬を教会堂の中へ入れること肯んじざるも、聖マールグヌスに衷心より願ひなしたれば、馬健やかになすを得たり。加へて修道士団の兄弟ら聖所にて燕麦を淨し、馬に食ますれば、益々元気取り戻し、遂には農夫、この馬永く、齢重ね働くこと能はずなるまで使ふを得、然る後、馬、老ひて死にゆきぬ》。

そこには常に、地域的ならびに出自的な音色が貫いており、さらに★³信奉中枢と農業経営の独自性も重なっている。もう一例を挙げよう（[訳者補記] 次はおそらく靈驗記の書名あるいは章題）。『至福の処女マリアすなわち★⁴ヴァルトラストの広く知らるゝ慈愛の御母の代願によりて発現せし良き出来事の第四例を挙示：1768年より1777年まで、毎年★⁵収穫月の第三日曜に説教壇より告知せらる。官庁許可済 インスブルックにて★⁶トラットナー書版によりて印刷 1778年』。そこに（S. 166）次の記載がある。《インスブルック上方ビルギッツ住なるペーター・グレーブナー、シュテルライン（[訳注] 峠の名前か）を抜けてワインを選びし折、荷車、馬らもろとも裂け目にはまりて数歩落下したり。ペーター、動揺せしも咄嗟に土地の救難聖女を仰ぎたれば、たちまち荷車と馬ら共に落ち着き、疵一つなかりき》。農民繪畫の周知の描写に、ここでは靈驗の書冊が伴うのである。これらすべてには、まとまった世界としての農民の生活圏が息づいている。

[訳注] ★¹聖マールグヌス（Magnus）聖マング（Mang）とも言い、中世から現代までフュッセンの守護聖者で僧院創設者、伝承では840年頃に最初の僧院（Abtei St. Mang）が建立された。★²フュッセン（Füssen）バイエルン・シュヴァーベン地方の小都市で、ティロールへ向かう街道沿いに位置する。★³信奉中枢：ここでは、地域の崇敬を集めている霊場を指す。★⁴ヴァルトラスト（[Maria] Waldrast）ブレンナー峠に近い有名な巡礼地で、「聖母マリアのしもべ会」（Serviten: OSM）の僧院によって運営されてきた。★⁵収穫月：9、10、11月、またはそのいずれか。★⁶トラットナー書版（trattnersche Schrift）トラットナー（Johann Thomas Trattner 1719-98）はハンガリー王国ヨルマンスドルフ（Jormannsdorf）に生まれ、ウィーンに没した出版人。書籍づくりにおける新機軸によって成功し、マリア＝テレジア女帝の下、宮廷出版の運営者となるなど、ドイツ語圏における出版界の雄であった。ここではその系列で印刷されたことが誇らしく謳われている。

同じく昔から今日まで民衆信心と強く結びついてきたのは★願像（Gnadenbild）である。それは、民間の語り物にも広く延びており、また近年のファティマの立像がゴシック様式のピ

エタ像に重なったことから知られ、さらに熱誠な人々の手が像を飾ることからも、バイエルンのアルトエッティングやヴェストファーレンのヴァーレンドルフにおける新たな荘厳の行列⁶⁵⁾からも明らかであろう。たしかに啓蒙主義は各地で願象を処分したり、格下げを図ったりした。願像は末院教会堂に移されたり、本院教会堂でも片隅に追いやられた。^{*}モンジュラとメッテルニヒの時代には、片隅図像を迎えるのは片隅ミサであった。

[訳注] 片隅ミサ (Winkelmesse) は宗教改革者ルターが1533年の「片隅ミサと坊主聖別について [Von der winkelmesse vnd pfaffenweihe]」において使った表現。ルターは特に教会が死者靈魂のために行うミサを靈魂の売買と利得として《片隅ミサ》と呼び、また万人祭司説の考え方から司祭の特別視を糾弾した。その文脈では、《片隅ミサ》はキリスト教の本義から外れたこそこそした行為になるとの非難であった。——ここでは宗教史上の有名な表現を援用して、願像が文字通り片隅図像 [Winkelbild] になり、それへの信奉もまさしく片隅ミサになったものだった、と言う。

続く時代には、小規模な霊場 (Gnadenorte) や田舎の文化的中心地について言えば、さらに衰微と著しい後退を経験することになった⁶⁶⁾。しかしそれにも拘わらず、聖母像を始めとする聖像の民衆宗教的機能は、変わることなく全うされた。とりわけ^{*}19世紀半ばの巡礼観念の刷新以来、毎年、ドイツの民衆体圏では、巡礼者の大きな団体の動きが見られるようになり、そこで強く表れたのは農民的要素であった。近年では、(これだけが特別の周年祭と言うわけではないが) ^{*}クサンテンの聖ノルベルト (1134年没) の800年祭があり、また1933年には^{*}トリーアの聖所への膨大な人数の祈願行をみることができた。そのさい、1936年のクサンテンでは、昔ながらのヴィクトル衣装の巡礼者も5万人を数えた。もっともこの年、昔の装いの、いかにも土俗の魅力^{まさかり}を発する《鉞 武者》の一団が出なかったのは惜しまれる⁶⁷⁾。

また民衆信心において絶対的な脱自然化、すなわち自然からのすさまじい乖離が起きているというのも正しくない。もっとも、この見方はすでに少し薄れつつある。が、別の見解が勢いを増している。多くの民衆は、昔と変わらず、神聖な泉に押し寄せている。それはルル

65) ヴァーレンドルフにおける8月15日の魅力あふれる習俗については次の小冊子を参照, *Mariä Mimmelfahrt in Warendorf*. Warendorf 1925.

66) しかし別の面もあることについては後出 (「希望の予兆」の始め)

67) Johannes QUASTEN, (*Wallfahrtsorte in Westfalen und am Niederrhein*). In: *Volk und Volkstum*, Bd. 1 (1936), S. 181ff., bes. S. 187. その記述によると、聖者ヴィクトルの聖遺骨の棺を土地の伝承ではリクトル (Liktoren) と呼ばれる鉞武者が付き添っており、これらの武者は、今日も兄弟団の祭礼では恐ろしい出で立ちと仕草で練り歩く。[訳注] 一人の男児がヴィクトルに扮し、それに三人の大人が武者の扮装で付き添い、その《まさかり武者》(Billekerls) の呼び名は Beil (斧), Kerl (野郎) による。: ——巡礼地トリーアは、1933年には1,200,000人の順礼者を数えた。

ドの洞窟やスペインの*バヨナの泉だけではない。アーモルスブルンやノイデナウやマリアブルンやフェレンのレンガースブルン、さらにオットーリエンブルンやバイエルン森のブリュンドルカベレもそうである⁶⁸⁾。「ガングコーフェンの聖なる泉に坐します神の御母の奇蹟の願像 1844年」という4頁の祈願紙片があり、最初の頁には美しい風景とそこに立つ礼拝堂が描かれ、泉が湧き出ている。そこに綴られているのは、紛うかたなき民衆的マリア禱念である⁶⁹⁾。

おゝ、神の御母よ、貴女さまは、命ある三度の聖性たる泉であられます。そこよりアダムの子らは数え切れぬほどの御恵みを汲んでまいりました。今、この筆舌に尽くせぬ危険の中、私は貴女さまにおすがり致します。

ごく最近加わったのは、アルトエッティングの*コンラート=パルツァムの泉である。もっとも、聖なる泉が昔ほど有難いと受けとられていない傾向がないわけではない。その衰微は、オフィシャルな信奉の故ではなく、むしろ現代文明にある。人々は、もはや水汲みに森の泉へ通うことはなく、ホテルの部屋でも水道が通っている。科学技術と経済の力としての水は畏敬の次元から遠ざかり、薄明りと夕闇の様を呈している。

昔から喜ばしく受けとめられてきたものに樹木があり、また何かと言えば樹木信奉が言われるのは度が過ぎてはいるが、やはり生きた痕跡には違いない。と共に、新たな靈性に食い込んでいいる。それには、*クリストフォルスのモチーフを民衆が喜ぶことが関係しているだろう。聖者でもあるこの巨人は大木を手にしており、アウクスブルクの大聖堂では像高は15メートルにもなる。また(南)ティロールのリダンナ([訳注] 現・伊領)の場合はヨーハン・ペルガーの設計による主祭壇だが、そこでは聖者は巨大な切り株を担いでいる⁷⁰⁾。また*オットーボーレン上方ヴァイルのエッグスリートでは(in dem Weiler Eggisried oberhalb Ottoheuren)の礼拝堂のように、農民たちが聖者のフィギュアに自然のままの切り株を重ねて

68) 次の文献を参照, F. X. BUCHNER, *Missionsbrunnen und Taufbrunnen in detuschen Gebieten*. 述 In: *Volk und Volkstum*, Bd. 1 (1936), S. 201ff.; DERSELBE, *Volk und Kult* (1937 前掲注 1), S. 22.; さらに古い時代については次を参照, Ch. VÖLKER, *Religiöses Volksleben im Bistum Paderborn* (1936 前掲注40) S. 156ff.; G. SCHREIBER, *Heilige Wasser in Segnungen und Volksbrauch*. In: *Zeitschrift für Volkskunde*, N. F. 6 (1935), S. 198ff.; J. VINCKE, *Volkstum und Recht* (1937 前掲注 7), S. 33.

69) この祈願紙片 (*Wunderthätiges Gnadenbild der Mutter Gottes im heil. Bründel bei Gangkofen. 1844*) は筆者の収集資料。

70) 参照, Heinrich WASCHGLER, *Johann Peter. Ein heimischer Meister barocker Bildhauerkunst*. 前掲 In: *Der Schlern*. Illustrierte Monatsschrift für Heimat- und Volkskunde, 17 (1936), S. 146ff., bes. S. 149.

いることもある。

この他にも、*ガイスフェルトのヴェンデリーンのオーク（Wendelinseiche bei Geisfeld）や、*ゼメリング地方グロックニッツ近郊グラーフエンバッハ（zu Grafenbach bei Gloggnitz in Semmringgebiet）の黒松（Schwarzföhre）は年輪の模様が（民衆の受け止め方では）聖母を示しており、その見方は今も生きている。*エトムント・フリースによれば、オーストリアの聖像の樹（der Bildbaum ビルトバウム [訳注] 樹木に聖像・聖畫を取り付けたもので普通名詞でもあるが、地名になっている場合もある）は17世紀以来この上ない人気スポットになった⁷¹⁾。またパーダーボルン司教区では、*ヴォルメルンの森の《聖なるオーク樹への》祈願行列（im Walde bei Wormeln）が1783年でも（[訳者補記] 啓蒙主義の巡礼地排斥の風潮下でも）なお行なわれていた。しかしそこには十字架が立っており⁷²⁾、したがって樹木モチーフと十字架モチーフが交じり合っていたのかも知れない。それは、幾つかのマリア〔聖母〕巡礼地を思い浮かべてもよいだろう。*ロールのマリアブーヘン（[訳注] 地名：マリアのブナ樹）、あるいはヴェルツブルク司教区の*マリア・エーレンベルクのブナ樹（die Buche von Maria Ehrenberg im Bistum Würzburg）、あるいは*アウクスブルク司教座の樹園（das Baumgärtle in der Diözese Augsburg）⁷³⁾。また*（[訳者補記] この時期の民俗学ではなお通用していた考え方として、古ゲルマンの）民会場の樹群あるいは厳かな一樹の下での祝儀や浄祓を思わせるものが尊ばれ、それが今日なお続いていることがある^{73a)}。

依然として見受けられるのは、聖母や聖者の姿、さらに普通の人の似姿が、石壁や木柵ではなく、生きた樹木に取り付けられることである。畑地の泉の場合は、そこに気持ちのこもった飾りが施されたりする。そうした図像が像柱への、それどころか礼拝堂の道しるべとなっていることも珍しくはない。ちなみにシュタインガーデンの修道士二人が、虐待を受けるキリストの像を彫ってヴィースの農夫ローリに与えたのは1738年のことで、それが*ヴィース教会堂へ発展した。言うまでもないが、上パイエルンのロロコ建築の白眉たるドミニクス・ツィーマーマンの傑作である。

民衆の空想が民間で好んで語り伝えられている記憶に立ち返ることもよく起きる。その際、農民ならではの、むろん時間と共にあれこれの影響を受けることはあるにせよ、語り物を保守的に伝える存在となる。樹木が焼けて中が空洞になった中に古い奇蹟のピエタ像を

71) E. FRIESS, *Wallfahrtswesen* (1936 前掲注40), S. 42.

72) Ch. VÖLKER, *Religiöses Volksleben im Bistum Paderborn* (1936 前掲注40), S. 160f.

73) Ch. SCHREIBER, *Wallfahrten durchs deutsche Land* (1928 前掲注7), S. 6f., 502, 503.

73a) Eberhard von KÜNSBERG, *Rechtliche Volkskunde* (Volk, Grundriß der deutschen Volkskunde in Einzeldarstellungen, hrsg. Kurt WAGNER, Bd. 3), Halle a.d.Saale 1936, S. 100.

見つけたティロールの農婦の話もそうである。病を患っていた農婦は、夢で、バイアラントの梨の樹へ巡礼をすれば治癒するとのお告げを受けた。そしてエックナッハの梨の老木にたどりつき、願いを聞き入れられた⁷⁴⁾。今日の霊地マリア・ビルンバウム（〔訳注〕地名、意味はマリアの梨樹）である。

樹木が霊験につながった場所も幾例となく数えられるが、それは特に祈願行脚の始まりに関わることが多い。ちなみにケルンのカプチン会士レナトゥスによる魅力的な信心書『マリアの御恵みの水流』には、農民的な筋立てにおいて好まれてきたユダヤ人モチーフによる話が入っている⁷⁵⁾。

レールからカールシュタットへ行く途中に森がございまして、そこには大昔から大きなブナの老樹が聳えておりました。むろん邪魔になるようなものではございません。ただユダヤ人にとってはそうではなかったのであります。あるとき、一人の不遜なユダヤ人がやって参りましたが、その樹のために通れません。ふと見ると、大きな枝の間に小さなピエタ像（〔訳注〕悲しみの聖母）がございました。ユダヤ人は、瀆神の気持ちちがむらむらとわくや、ナイフをとって切りつけましたが、その痕は今も残っております。が、そのとき、どこからともなく小さな悲鳴が聞こえまして、その途端、ユダヤ人は恐怖に襲われ、その場を動くことができなくなりました。そして、とうとう捕まり、相応の罰に処せられたのであります。今は、そのブナの樹を覆って見事な教会堂が建てられており、諸人の参詣が絶えません。

他にも、民衆色を帯びて浮かび上がる事例は多い。シュヴァーベン特有の家屋の正面に一樹の梨があり、花をつけ緑の葉が茂り、そして実が熟した。この地方の多くの農民がこの樹に何が起きたかを知っている。幼子イエスがカウフボーレンの福者*クレスツェンティア（1744年没）の前に、あどけなくも優しく現れたのである。この出来事は、農民たちの家族に影響しないわけにはゆかなかった。それも世代から世代へと。女の子が生まれると、クレスツェンティアの命名したのである。事実、その名前は洗礼名簿から墓地十字架へと引き継

74) Anton MAYER- PFANNHOLZ, *Wandern und Sehen*. München 1930, S. 181f.

75) *Marianischer Gnaden-Fluß, Abgetheilt In 31. Ggeistliche Bächlein GOTT und Mariam Die Himmels-Königin, Nach dem Exempel der Heiligen, täglich zu verehren. Auf jeden Tag des Monats mit einem Gnaden-Bild gezieret, so an dem Rheinfluß in den drey Erzstiftern Maynz, Trier und Cöln, mit sonderlicher Andacht verehrt werden. Samt Morgens-, Abends-, Meß-, Beicht-, Communion- und andern Gebethern eingerichtet, vermehrt und verbessert Von A. V. P. Renato, Coloniensis Capuciner-Ordens Priestern. Eilfte Auflag. Mainz 1755, S. 45.* これには多数の銅版畫が入っている。

がれていった。

またクリスマス・イヴにクリッペに飾られる樅の樹も、自然とのつながりを感じさせる。万聖節に、したがって万霊節を前にした徹夜課に灯を携えて手渡すのも樅である。他にも、棕櫚の主日の聖別には柘植がある。さらに*野草については、聖母の野草の日、またいわゆる菓草の日がある。あるいはまたグロットカウ地方では、マリア生誕の後の日曜に《恵みの束》に聖性を帯びさせる⁷⁶⁾。上バイエルンのジークスドルフその他において収穫感謝祭に祭壇に置かれる生命の樹も挙げるべきだろう。収穫物で飾ることもあれば、祭壇を多いつくすほどの花輪を添えることもある。穀類を輪状に編んだり、籠に盛ったりもする。葡萄の房やトマト、林檎、梨に麦の穂を添えて祭壇机を覆ったり、それどころか教会堂を埋めるくらいに並べることもある。そうした農民の祭りにおいては、菜園⁷⁷⁾も麦畑は収穫感謝の場と神の館そのものになる。神の恵みの賜物で満ちた巡礼地になると言ってよい。

かく、折に触れて自然の諸要素が靈性に組み込まれ、しかも神秘に包まれる。しかし土の香り、土との結びつき、持ち伝えられた民らしさ、ゲルマン性、これらも多寡はともあれ重なっている。恵みがかなえられ、あるいは厳かな収穫感謝が執り行われるとき、ドイツ民衆の心情が発露する。畑と森をずっと愛しい思いで抱えてきた祖先以来の憧憬と古き思念⁷⁸⁾が、今も目覚め歴然と現れる。

キリスト教とゲルマン性とが、他のどこよりも密接に交流するのも、これらの局面においてである。そこで一か所からどころでなく聞こえてくるのは、古い教会会議の決議や、*ブラガのマルティーンから*ウォルムスのブルカルトに至る贖罪書が伝えるキリスト教徒となったゲルマン人に向けた問いかけである。《汝、泉へ行きしや、山を訪ねしや、巖に赴きしや、森に入りしや、樹々に縋りしや、而して禱りごととして供物を捧げしや》⁷⁹⁾。この問

76) この恵の束 (Weihbünde) は15種類から20種類の草本から成る。これについては次を参照, Georg MEIER, *Bäuerliches Brauchtum im Grottkauerland*. In: *Der Oberschlesier*, 16 (1934), S. 203ff, bes. S. 209.

77) これが民俗学にとって意義深いことは次を参照, Hermann CHRIST, *Zur Geschichte des alten Bauerngartens der Schweiz und angrenzender Gegenden*. Basel 19230 (2. Aufl.)

78) ここでは特に耕地巡り, すなわち Oeschungang, Oeschprozession と呼ばれる信奉行為を思い起こしたい。なお Oeschgang にゲルマン的記憶の余韻 (境界石としての樹木, 境界をめざす歩み) をみとめた次の文献を参照, Josef BALLE, In: *Klerusblatt*, 16 (Eichstätt 1935), S. 366ff., bes. S. 367.; またファイトは, ドイツの境界巡回には, ゲルマン起源と南ガリア=教会的起源の2種類が並行していたと見ている。参照, A. L. VEIT, *Volksfrommes Brauchtum und Kirche im deutschen Mittelalter* (1936前掲注29), S. 107.; またフィンケを参照, J. VINCKE, *Volkstum und Recht* (1937前掲注7), S. 38f.

79) 多数のヴァリエーションがあるが, ここで挙げたような文意が行なわれていた。参照,

いは、二つの世界を区分するように見えるが、民衆信心はこれを引き継いでおり、またドイツの民衆信仰心のなかで折に触れて（その時の経過とともに機縁もキリスト教的なものとなっ**て**はいるが）自然とのかかわりでこだまを響かせてきた。高原や山巔、巖や森が、農民的キリスト教と村落的な民衆信仰心の関与するところとなった。ドイツ民衆の色合いが濃い各地において、森の礼拝堂や山巔に立つ教会堂へ向かう巡礼が形成された。農民祈願者は、*アマー湖の聖山アンデックスへ赴いた。ここではすでに16世紀には、バイエルンのモンセラート〔訳注〕スペインの著名な巡礼地）と誇らしげに言われていた⁸⁰⁾。農民巡礼者たちは、祈願を続けて、ジーゲスドルフの高地のザンクト・ヨーハン教会堂へ詣で、またシュパイヒンゲンの聖三位一体の山へ登った。ゲオルクの騎行が目指すのも、トラウンシュタインのエッテンドルフに所在する高地礼拝堂で、そこからはアルプスに連なる標高の高い神に嘉された耕地が一望できるのである。他にも、ホーフのレーオンハルトの騎行が向かうのはベツィスリートで、これはオットーボイレンのベネディクト会修道院の管内である。むろん、マルクト・テルツやベネディクトボイエレンも、これに関連して取り上げておきたい。

すでにふれたことだが、オフィシャルな信奉にもその真只中に、民衆信奉の特別区が存在する。すなわち、民衆的な帰依心によるロザリオ祈禱やピエタ像を前にした禱り、あるいは

Hermann Jos. SCHMITZ, *Die Bußbücher und die Bußdisziplin der Kirche. Nach handschriftlichen Quellen dargestellt*. Bd. 1. Mainz 1883, S. 330.; なお資料に広く目配りしたものとして、カロリング朝期の宣教教理手引きを取り上げた次の文献を参照, Joseph Michael HEER, *Ein karolingischer Missionskatechismus. Ratio de Catechizandis Rudibus und die Taufkatechesen des Maxentius von Aquileia und eines Anonymus im Kodex Emmeram. XXXIII saec. IX*) (Biblische und patriotische Forschungen, Heft 1). Freiburg 1911, S. 24f. しかしこれに添えられた解説は詳しいとは言えない。——それゆえ『ゲルマン上古事典』(J. HOOPS, *Reallexikon der Germanischen Altertumskunde*. Straßburg 1911ff.) の補巻(解説篇)の刊行が望まれる。; この種の個別地域に関する研究で、ゲルマン上古をも射程に置いた成果が現れている。ヴェストファーレン地方についてはフェルカーを参照, Christoph VÖLKER, *Aus dem religiösen Volksleben im Bistum Paderborn* (1936前掲注40), S. 156ff.; モーゼル=フランケン地域については次を参照, Johannes HAU, *Zur Volkskultur des Trierer Raums*. In: *Volk und Volkstum*, Bd. 2 (1937), S. 270ff. この論考では次の考察がなされている。《聖キリヌス(hl. Quirinus)及び三人の聖処女(heilige Drei Jungfrauen)への崇敬は、特定の一つの泉あるいは一つの水流と結びついている、その位置状況からは、たいてい異教の信奉地であった場所である》。; 関係する文献の案内として次の自著を参照, G. SCHREIBER, *Wallfahrt und Volkstum* (1934前掲注40), S. 45, 81, 89, 177, 192, 209.; また次の文献を参照, Medard BARTH, *Der Kult der drei Straßburger Jungfrauen Einbeth, Worbeth und Vilbeth*. In: *Archiv für elsässische Kirchengeschichte*, 11 (1936), S. 57-106. 三人の女性については、さらに最近の研究を参照, Christoph SCHÖLL, *Die drei Ewigen. Eine Untersuchung über germanischen Bauernglauben*. Jena 1936.

80) 次の自著を参照, G. SCHREIBER, *Deutschland und Spanien* (1936前掲注17), S. XIV.

十字架の前でのプライベートな集まりなどだが、その依って来る所以は、永い伝承と個々人の敬神、（これも最後に言い添えるべきだが）生きて躍動する規律づけの精神から来る自明自若たる禱りのかたちである。バイエルン森の礼拝堂、たとえばハウツェンベルク近郊ティールハムの森にぽつんと立つ小さな教会堂、しかしまたシュヴァーベンアルプスの高地に点在する信奉の処々、さらに他の農民地域にもそうした禱りの集いが知られている。特に、ロザリオ月としての10月がそうである。しかしそれ以外にも、ヴェストファーレン地方の竈の火の暖かさは、ロザリオで禱り、祈禱パンフレットを読み、子供や子飼いの者たちと共にする宵の禱りの温もりと重なっている。

7 民衆信仰心のダイナミズム

民衆信仰心と農民信仰心はドイツではほゞ千年にわたってきわめて保守的な特質を示してきた、といった見解に文献で目にすることはめずらしくない。また、それが大きく転換するには啓蒙主義⁸¹⁾を待たねばならなかった、つまり民衆的敬神の野を、途方もない規模の震撼が山崩れさながら襲った、とも言う。

たしかに啓蒙主義による荒廃は甚大であった。その余波は今も残っており、最近、ルードルフ・クリスは巡礼をめぐる、特定の場所についてそれを明らかにした⁸²⁾。しかし啓蒙主義の負債を一面的に借方に記入するのも問題である。一面的な計算と思い込みは、民衆宗教性の構造を捉えそこねていることから来ている面がある。ドイツの民衆信仰心は、時代条件の制約と現実の移り行きのなかでも活動と変転をけみしていたことを過小評価してはならない。

民衆宗教、それは正に、進展し変化する力強い流動である。溪流と熱狂の山岳を擦過する

81) プロテスタンティズムの宗教改革者の独自の位置については、ヨープストの『プロテスタント教会堂と民衆性』が改めて注意を喚起した。参照、A. JOBST, *Evangelische Kirche und Volkstum* (1936前掲注1) ——ここではそれは特に考慮しなくてもよい。しかし前代の民間習俗がプロテスタント教会系の農民の間で延命したこと、もっともそれにはゲルマン主義 (Germanismus) に支えられた面があるが、これは特に研究に値する、とりわけ司牧監査規定 (Visitationsordnung) に合わない場合がそうである。実際、部分的な改変や意味付けの変更をけみしつつ、延命したものも少なくない。これについては先に取り上げた (本誌52号, p. 157-158)。; 最近では次を参照、Georg BUCHWALD, *Volkskundliches bei Luther*: 於 Köln 1936.; またこれを問題にしているものとして次を参照、HUPFELD. In: *Theologisches Literaturblatt*, 57 (1936), S. 279ff.; さらに次をも参照、Pau. GEIGER, *Deutsches Volkstum in Sitte und Brauch* (Deutsches Volkstum, hrsg. von John MEIER, Bd. 5 [Berlin, Leipzig 1936, S. 34f., 48f.]

82) Rudolf KRISS, *Moderne Wallfahrten*, bei G SCHREIBER, *Wallfahrt und Volkstum* (1934前掲注40), S. 273ff.

や、広い川床の豊かな地域をも流れ、さらに下って平野を潤し、様変わりする川岸から新たなモチーフを獲得する。イラー川、イーザル川、マイン川、モーゼル川、これらの河川には船乗りたちの帰依があり、場所によって筏師たちの兄弟団も知られていた。岸辺の諸所の願像と聖所からも変化は起き、民衆の帰依の新たな内実が現われ出た⁸³⁾。いずれにせよ、この民衆宗教にあっては、多くは活動とリズムであり、来たりて行くものであり、形成にして改変である。しかしまた、そこには損なわれることのない核があり、それを中心に運動が生起する。かく、常に農民に向けて発せられ、その目前に立ち現れるのは、そうしたキリスト教の信心財、言い換えれば《真実と倫理的法則というさらに高い価値を帯びた産出的生命原理》である。

ドイツ国内だけのことではない。諸々の民衆体は、外部からも、すなわちキリスト教全体(christliche Ökumene)の諸領域からの作用と影響をも受け入れる。そのさいドイツの農民存在は驚くべき力を発揮して、入り来たり流入した民衆宗教性を独自の自立した形態において認識するのみならず、異様なヌミノース経験の力みなぎる充実において形づくる。

ゲルマン人への宣教は千五百年を経てなお民衆信奉に余波を見せている。それと並んでアイルランド=スコットランド系の聖性弘布者たちの活動も、ドイツ農民性の中に強力に根付いている。名前を挙げれば、いずれも農民生活圏の庇護者とされる聖ブリギッダ、聖コロマン、聖フリドーリン、聖ガルス、聖キリアン、聖パトリキウスである。なお全ドイツ地域について適切なグループ分けをしつつ、これを論じたのは*ルイ・グゴーだった⁸⁴⁾。さらに、グゴーの全般的な研究と好対照をなすものに、*マティーアス・ツェンダーがライン地方について行なった家畜聖者の調査研究がある⁸⁵⁾。それによると、ライン地方において畜牛を護

83) このライン河・モーゼル川・マイン川の河川網をありありと記述しているものとして、先に挙げたケルンのカプチン会士レナトゥス『マリアの御恵みの水流』を参照、RENATUS, *Marianischer Gnaden-Fluß* (前掲注75)。同書はすでにタイトル頁に、河川の図を載せ、また次の注目すべき帰依の文言を掲げている。《毎月毎日、願像に彩られるは、ライン河水域にはマインツ・トリーア・ケルンの三大司教座ありて特別の帰依を以て崇敬せられるが故なり》。

84) Louis GOUGAUD, *Les Saints irlandais hors d'Irlande etudes le dans la devotion traditionnelle* (Bibliothèque de la revue d'histoire ecclesiastique, fasc. 16). Louvain, Oxford 1936. 著名なケルト研究家による貴重な論述であり、資料の挙示も豊富である。しかし添えられたイコノグラフィー資料は十分とは言えない。たとえば葡萄栽培農民の守護者としての聖キリアンの場合に言及される場合も(p. 128ff), 裏付けを欠いている。なお聖女ディムプナ(St. Dymphna)については、最近のクヴァステン⁸⁵⁾の考察を比較検討してもよいだろう。J. QUASTEN, *Wallfahrtsorte in Westfalen und am Niederrhein* (1936前掲注67), S. 193

85) Matthias ZENDER, *Schutzheilige der Haustiere im Rheinland*. In: *Rheinische Vierteljahrsblätter*, 5 (1935), S. 70-85.

る聖者は、聖ブリギッタ、聖ヴェンデリーネ、聖アントニウス（隠棲者）、*聖バルトロマイ、*フィデス・シュペース・カリタスのいわゆる三人の乙女、聖キリヌス、聖ロフスである。また馬匹を守護者では、聖キリヌス、聖ケルスス、聖エリギウス、聖ジルヴェスター（シュタルンベルク湖畔、すなわちペックリングでも）、聖マウリティウス⁸⁶⁾、聖レーオンハルト、聖ステパノである。なお聖ヴァレンティーン、聖ヤコブ、聖ヨドクスも家畜聖者として挙げなければならない。それは家畜の守り手としての聖ベネディクトも同様である⁸⁷⁾。他にも、農民色の濃い聖者は、さまざまに色彩を見せつつ広がっている。

他にも、たとえばアルザスは靈性において多くの独自性を蔵する地域で、特に*ルーツィアン・プフレーガーと*アルフレート・プフレーガーによって研究がなされている。前者は葡萄栽培農民の守護者を取り上げた⁸⁸⁾。後者は聖ステパノ、聖マルティーン、聖ゲオルク、聖レーオンハルト、聖エリギウス、聖フロレンティウスに注目して馬匹守護について考察した⁸⁹⁾。特にライン川中域と低地ライン地方（〔訳注〕Niederrhein: 仏表記ではBas-Rhin 従ってアルザス地方を指す）の民間信心の解明である。なおアルザスでは、家畜の護り手として一般的な十四聖人（⇒本誌52号, p. 156）、聖ファイト、聖エラスムス、聖ブラジウス、聖ガルス、聖ヴェンデリーネ、聖フリドーリン、聖ゼバ스티アン、聖ロフス、聖アガータ、聖アントニウス（隠棲者）、パドヴァの聖アントニウス、聖ヴォルフガング、聖モラント、聖マクシミン、聖パンタレオン、聖アルバン、*聖ゲネジウス（〔仏〕サン・ジュネ）、*聖ヴァンドレギーゼル（〔仏〕サン・ワンドリーユ）、聖ウルリッヒも知られ、さらにスペイン人*サラゴサの聖ヴィンセンティウスも加わる⁹⁰⁾。これらアルザスの家畜守護者においては、西フランク（〔訳注〕カロリング朝の聖王ルイの後継者に由来する今日のフランス地域）やガリア・クリスティアーナ（Gallia Christiana 〔訳注〕キリスト教化されたガリア [=フランス]）の意で、これをタイトルとする16世紀の大部な

86) 前述のヘルツベルクの著作を参照, A. HERZBERG, *Der heilige Mauritius* (1936前掲注40)。

87) ここではツェンダーの考察(1935前掲注86)に従う。論者は、その生産的な研究では、純粋に作成した地図に添えて、個々の聖者の崇敬について純粋に地理的な解説に限定した。すなわち、関係する儀礼・行事・民衆信心は省いている。なおそれには、後に補足を添えるとも述べている(S. 85)。しかしそれには資料研究の裾野を大幅に広げる必要がある。また信心行事や、禱念畫(Andachtsbild)、信心書、さらに民衆聖者への信奉に関わる贖宥の日取りなども組み込む必要がある。; ———なおモーゼル川水域については、最近の次の文献をも参照, J. HAU, *Zur Volkskultur des Trierer Raums* (1937前掲注79), S. 279f.

88) Luzian PFLEGER, *Die elsässischen Weinpatrone*. In: Volk und Volkstum, Bd. 2 (1937), S. 223ff

89) Luzian PFLEGER, *Roßweihe und Tierpatronate im Elsaß. Ein Beitrag zur religiösen Volkskunde*. In: Archiv für elsässische Kirchengeschichte, 10 (1935), S. 369–403. この優れた編集の『アーカイヴ報』には、他にも、庇護聖者について大いに裨益する多数の民俗学の論説を見ることができる。

90) 最近の自著を参照, G. SCHREIBER, *Deutschland und Spanien* (1936前掲注17), S. 526 (索引)

教会事典によって一般化した) との関係も明るみに出る。このライン上流域の民俗事象ならびに民衆生活の特質は、近年では、特に *J. M. B. クラウスによって見事に解明された⁹¹⁾。

これらの霊的・農民的な紐り方をされる聖者について、南ドイツにはさら注目すべきものがあるが⁹²⁾、いずれにせよ偶然とか恣意的とかではない。農民特有の苦境と憂慮の中、庇護者像が成るのを支えたのは、成形に関わる多くの力であった。それに与ったのは、部族性と風土、定住と移住、支配家門と団体、司教教会堂と僧院、聖所と祝福であった。それが典礼となり、民衆の帰依となり、家族(名前と姓)や兄弟団となり、*法諺や*基金となった。しかし信奉を喚起する上で、また話の一種であることによって何にも増して第一位を占めるのは聖者伝であった。それが、宮廷にも説教師の*例話本にも定着した。ヴェンデリーンが、先ず地主の豚の番人に、次に牛の番人に、最後に羊の番人になった⁹³⁾、と話すことではどちらも同じであった。かくしてこの農民的な霊的存在は、階梯をたどって羊飼いのものになった。この牧羊という職業は、村人の観念では、常に特別注目される位置を占めた。伝説において、幽霊譚において、天候予測において、民間療法において⁹⁴⁾。かく、霊性には、多かれ少なかれ民衆の生きた観念が寄り添っていた。

こうした信奉と口碑あれこれの流れが発するの、多様な民衆体からであった。

ドイツ圏には、多くの刺激が、すなわち代願者や強力な守護聖者が流入した。そこにはもちろんイタリアの民衆信仰心のモチーフも多数入っていたが(三聖王、*ロレト、*雪のマリア)、いずれもドイツに特有の音色と色彩を帯びるようになった。ドイツ民衆地域の無数の教会堂や礼拝堂には、真に農民的な感触のパドヴァのアントニウスが現われる。困窮した民衆の最も信頼できる弁護士としてだが、それはこの民衆聖者が、いかにも民衆に語りかける身ごなしに、防衛と戦闘すなわちゲルマン的な基本をひそませているからだけではない。

91) Joseph Maria Benedikt CLAUS, *Die Heiligen des Elsaß in ihrem Leben, ihrer Verehrung und ihrer Darstellung in der Kunst* (Forschung zur Volkskunde, Heft 18/19). Düsseldorf 1935.

92) Rudolf HINDRINGER, *Weiheroß und Roßweihe*. München 1932.; Romuald BAUERREISS, *Irische Fühmissionäre in Südbayern*. In: Wissenschaftliche Festgabe zum zwölfhundertjährigen Jubiläum des heiligen Korbinian, hrsg. Vvon Jos SCHLECHT. München 1924, S. 48.; Leopold TEUFELDBAUER, *Die Verehrung des heiligen Patritius in der Oststeiermark und im angrenzenden Niederösterreich*. In: Wienerzeitschrift für Volkskunde, 39 (1914), S. 83ff.; F. X. BUCHNER, *Volk und Kult* (1937前掲注 1), S. 26f.

93) *Lebensgeschichte des heiligen Wendels, Abtes und Einsiedlers aus den alten Legenden und Trierschen Jahrbüchern, auch aus den Urkunden des Klosters Tholey, und der Kirchen des hl. Wendels. Mit Erlaubnis der Obern*. Zug 1830.

94) 次の『民俗学事典』の《羊飼い》の項目を参照, Artikel „Hirt“ bei O. A. ERICH und R. BEITL, *Wörterbuch der deutschen Volkskunde*, S. 320f.

トルコ人に苦しめられてきた幾世紀にもわたって、この聖者は常に想い起こされた。^{*}《トルコのルイ》ことバーデン＝バーデン辺境伯が南東ヨーロッパが輝かしい勝利を取めた数多くの野戦において、同じく^{*}オイゲン公の戦場において、勝利はこの聖者に帰せられてきた。ドイツの民衆信仰心は、パドヴァのアントニウスこそレパントの海戦における霊的次元の元帥であったことを知っていたのと同じく、ドイツの農民的な小教会堂や農民礼拝堂では今もそれが祭壇畫や奉納繪において認識されている（たとえばミンデルハイムの畑地礼拝堂に立つオークの礼拝堂）。周知のように、多数の教会堂において、また祈念畫において、この陸軍司令官にして海の英雄でもある存在は、提督の軍装において描かれてきた。そこには、アフリカの^{*}オラン征服の記憶までもが重なっている⁹⁵⁾。今日でも、あの標高700メートルに立つムッセンハウゼンの^{*}マリーア・バウムゲルトル（Maria Baumgärtle bei Mussenhausen）の巡礼礼拝堂（バイエルン・シュヴァーベン）を訪ねる人は、農民教会堂の繪像の一つにオランの占領が描かれていることに驚くだろう。畫面では、アントニウスは霊的な司令官として占領を指揮しており、それを目にするや、人は、この聖者がリスボンの出身であること、またイベリアの人々にはサラセン人と防衛の脈絡に置かれていることを改めて想い起こすだろう。それだけでなく、フォアアールベルク（〔訳注〕奥西辺の州）に足を運んでも、同じ民衆的な追憶に出会い⁹⁶⁾、しかもアントニウスの聖歌と民衆調のレスポンソリウム（〔訳注〕聖歌の詠唱形式の応誦：独誦と斉誦の交代）がそれを支えていることを経験する。

[原注 96] これについては次を参照, Josef WEINGARTNER, *Die Kunstdenkmäler Südtirols*, Bd. 1-4. Wien 1923ff.; なおヴィルヘルム・ペスラーの論説では、ドイツの村の教会堂の内部についてはあまりに簡単に済まされている (S. 280)。参照, Wilhelm PESSLER, *Dorf und Dorffriedhof in deutschen Landen* (Handbuch der deutschen Volkskunde, Bd. 3, Heft 8/9).

村の教会堂、たとえばバイエルン森のトゥルマンスバング（Thurmannsbang）の聖堂は祭壇の仕様がすでに農民性を示し、また聖アウグスティヌスと聖ノルベルトに奉献されているのは、ただちにプレモンストレ会の開墾地であることを想起させる。隣接するブライング教区（Breying）にはプレモンストレ会の教会堂が存在したという事実もある。またトゥルマ

95) Beda KLEINSCHMIDT, *Antonius von Padua in Leben und Kunst, Kult und Volkstum* (Vorschau zur Volkskunde, Heft 8/9). Düsseldorf 1931.; Erhard SCHLUND, *Antonius von Padua. Festgabe zum 700. Todestag*. Wien 1931.; G. SCHREIBER, *Deutschland und Spanien* (1936前掲注17), S. 341f. パドヴァのアントニウスが正に《農民聖者》であることは、信心書や奉納繪やレスポンソリウムを一瞥すれば明らかである。

96) [訳者補記] 書誌データを超える長文のため本文へ移す。



[XI] パドヴァの聖アントニウスが描かれた奉納繪
1815年 カルテルン（南
ティロール Kaltern, Südtirol）
のフランシスコ教会堂
に施納されていた。出典、
B. Kleinschmidt, *Antonius von
Padua in Leben und Kunst, Kult
und Volkstum*. Düsseldorf 1931,
S. 286, Abb. 227.



[XII] 戦争守護者としてのパド
ヴァの聖アントニウス
（第一次）世界大戦時の
インスブルックの郵便葉
書 出典、同上、S. 356, Abb.
341.



[XIII] 幾重もの衣装が着せら
れた聖母像 聖母像は18世紀
プリュム郡ブローンスフェルト
（Pronsfeld, Kr.Prüm/Rheinland
RP）の旧・教区教会堂 出典、
Die Kunstdenkmäler der Rheinprovinz,
Bd. 12,2, S. 449, Abb. 96.

ンスバング聖堂の右の脇祭壇は聖レーオンハルトへの献堂で、聖者は家畜守護者・捕虜救難者の形姿で表されており、そこには聖レーオンハルトへの献金箱も添えられている。この聖堂には、農民の守護聖者として、また聖フローリアンと聖セバスティアン（二か所）が見られる他、霰電守護者の聖ヨアヒム、嵐の守護者フランシスコ・ザビエル、さらに農民の優しい聖女である御主の祖母すなわち聖アンナは路傍の小祠によってウィーンへの道を指し示している。加えて、壁面上方に吊られた素朴な使徒燭台として十二使徒もみとめられる。それらは簡素ながらも、大きなバロック教会堂の壮麗華美を巧まずして想起させる。なぜならこの控えめな作りに走るある種の統一したリズムは、後代の没様式を時に赤面させずにはおか
ないからである。

また目を外へ向けると、農民の生活圏に親しい外界がある。それは、（〔訳者補記〕上述の諸聖人の図像など）屹立する諸々のシンボルによって浄聖され麗しくされた森と畑との生き生きした対話である。同時に、農民が幾世代にわたって包み込まれた運命的な出来事の生き証人でもある。この移住地の最初の教会堂は1476年に教区教会堂として建てられ、三十年戦争（1618-48）で破壊され、1763年に新たに再建されたのだった。

さらに、南東ヨーロッパのドナウシュヴァーベン地方の数多くの教会堂を判断する上で鍵

にもなる。それらがコピーではなく、故土の生きた枝分かれであるのは、ブドウ栽培やトウモロコシ畑の存在もこの霊的な聯関に位置づけることができるからである。事実、研究分野としてこの方面への広がりも見られるが、ドイツ・アカデミーが（すでに南東方面への学術的関心を強めてはいるが）これに取り組むことが望まれる。